

続・米沢有為会々誌考

京都支部 新 野 昌 生

まえがき

五年前、当誌創立一一〇周年記念特集号に、表題の寄稿をしたが、そのとき宿題になったものが幾つかあった。それらをここで拾いあげてご報告したい。

その一つは、「有為会雑誌・首号」の出現である。これは前回の記念号への寄稿後に気づいたもので、米沢市史・近代編を読んで、その四三三頁に一枚の写真「有為会雑誌第三号」の表紙が載っていた。この表紙の前頁、即ち第二号の末尾の頁も、製本の都合からであろう、一緒に載っていて、その文章を何気なくルーペで拡大して読んでみたところ、「本会雑誌の旧第一号を首号と改める」という「会告」の文章であった。

もう一つは、百年を超える歴史を誇る有為会の会誌の全巻が現存しているという奇跡的な現実の陰に、実は隠れた美談のあった事が分かったことである。これについ

ては、記念号の上で「太平洋戦争の末期、東京興讓館に保管されていた有為会誌の、創刊号から第四八八号までの全巻が、興讓館が全焼する直前に、米沢図書館に疎開されていて、戦災を免れることが出来た、という話は、一体どなたがその指揮をとられたのだろうか、是非知りたい」という主旨のものを書いたところ、ご親切にも高橋俊龍氏（元東京都副知事）からお手紙を頂き、それは当時の東京支部長であり、興讓館長でもあった北村徳太郎先生である、と教えて頂いたことである。

このほか、有為会誌としては全く異例の表紙のものがあつた。それは明治四十年の新年号で、しかもそのデザインを担当されたのが、筆者の興讓館中学時代の図画の先生であつた窪島政男氏であると分かつた事や、前記記念号で触れた、終戦直後の昭和二十四年七月に復刊第一号の会誌となるべく出版されたものが、依然として幻の

ままだである事の後日談など、有為会誌の後ろ姿を、断片的ながら拾いあげ、責めを果たしたい。

有為会雑誌の首号とは

米沢市史を読んでいて、あまりの細字でルーペで覗いたその中に「首号」という見なれない字が現われて驚いた。今の今まで全く想像もしていなかった字である。

とにかく確認のために、ちゃんとしたものを見ておく必要があると思ひ、米沢図書館に勤務中であつた佐藤由美子さんをお願いして、有為会雑誌第二号の末尾の頁にある筈の「首号」の記事を中心に、この「首号」に係わりのありそうなものがあれば、判断の上で探して頂き、それらのコピーを送って頂くようお願いした。

この有為会雑誌第二号は、明治二十三年二月二十八日出版のものであつて、有為会雑誌としては最初の本格的な活版印刷物であつたが、その末尾の頁を見ると、こう記してあつた。

「会告」

一、本会雑誌旧第一号は首号と改めて本誌の附録とし唯続き物のみ掲載し餘は追て……とあつた。

(以下の行は省略する)

この会告はその文面から推察すると、旧第一号の雑誌というのは、外に見当たらないから、多分前回の復刊第四九号の七六頁に掲げた「第一回」第一号（創刊号、明治二十二年十二月十四日刊）を指すものと考えられ、本文はガリ版刷りのものである。これを今回活字印刷のものに改め、正式に「首号」という呼び方の形とし、これを第二号の附録として掲載する、という一応会誌としての体裁を整えたものにしたもの、と解釈した。

そこで、活字化された有為会雑誌・首号の内容を、前のガリ版刷りの旧第一号と比較してみると、全体的には旧第一号の内容を活字化したものであるが、従来よく引用されていて馴染みの深い「緒言」の見出しと、その中の言葉が消えていて、「緒言」は「趣意書」に替わり、その内容もかなり違ったものになつていた。

察するに、会の将来を考えて、会誌は最新の活版印刷の「首号」から出発するという体裁のものに統一したい考えに立つたものと思ふ。

この首号に関連して、以前から気になつていたのが、有為会の創立年月日である。筆者が平成十一年の復刊第四九号に寄稿の時、今までの通り何の疑いもなく、創立の日を明治二十二年十一月二十三日神嘗祭の日と記し

た、ところが編集部から新嘗祭が正しいのではないか、というチェックが入って愕然とした。正にその通りなのですぐに新嘗祭と訂正した。

しかし今までの会誌には何故かどれにも、十一月二十三日神嘗祭とある。どちらかに誤りがあると思われるので出典を明らかにして正しい創立の日を示して頂きたい。

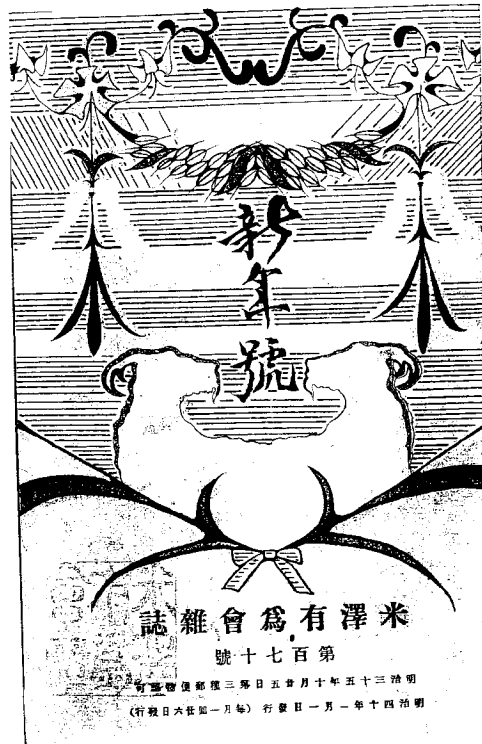
異例の新年号の表紙

有為会雑誌を見ると、表紙は通常かなりの期間同じデザインのもので通されているのに気付く。ところがその中に、唯一例外の表紙があった。明治四十年一月一日発行の米沢有為会雑誌・第七十号である。大変珍しいので紹介したい。

なぜこのような表紙のものになったか、そのいきさつがこの雑誌の「はしがき」にのべてあるので、明治の名文をとくと味わって頂きたく、そのまま掲げてみる。

「はしがき」

初日の光鮮かに、明治は茲に四十の年を迎へぬ、不惑の年の分別盛り其活動や嘸ぞ、本紙も早や妙齡十七の春を迎



へ、新調の春着に新年の御会挨拶申すも嬉しく、羊の年に姿こころも優しければ、只初めは処女の如しと見給へて、終は脱兎の勇あるを忘れ玉ふな。

因に記す、表紙は窪島政男君の意匠になり、白百合の花は素朴にして雄健の意を宿し、中央のフェストゥーン即ち輪は米を現し米沢を因み、羊は本年を意味すと、茲に記して以て同君の勞を多謝す。

ここに窪島政男という名前が現われて驚いたが、同氏は筆者の興讓館中学時代の図画の先生であった。窪島先生のことにについては、今まであまり聞いた事が無いので、

この機会に古い記憶を呼び起こして、思い出せる範囲のものであるが記してみたい。

窪島先生は米沢市膳仲町（現城南三丁目）の生まれ、明治三十八年米沢中学卒業、東京美術学校（現東京芸大）に進んだ後、当時すでに始まっていた「帝都の顔」・東京駅の建設工事の責任者辰野金吾博士の傘下に入って設計の仕事に携わった。大正三年東京駅の竣工の後、米沢に戻り大正四年から母校の図画の教師となり、昭和六年三月退職された。

この経歴から見ると、明治四十年の米沢有為会雑誌の新年号の表紙絵の作成は、多分東京美術学校時代の作品であろうと思われる。

我々中学生も窪島先生から、いろいろと面白い話を承ったのであるが、矢張り東京駅関連のものが多かった様に思う。筆者の記憶に残っているものの最たるものは、東京駅内の天皇の休憩される御座所設計の話で、完成した時一寸腰かけてみた、という貴重な体験談であった。

またご自分の作品として自慢しておられたのは、東京駅の切符を売る出札窓口のところ、客の整理用に作られた孔雀をデザインした衝立^{つたせ}であった。これは筆者も興味があったので、上京した時東京駅に行って見た事がある。

る。出札窓口は沢山あるので、先生のブロンズ製の孔雀の衝立が、沢山並んでいたのを今でも覚えてる。

会誌全冊を戦災から護った恩人

当誌復刊第四九号に寄稿した「あとがき」の中で「戦時中、東京興譲館にあった、創刊号以来の米沢有為会雑誌四八八冊を戦災から免れるために、いち早く米沢図書館に疎開させる指揮をとった人は、いったい何方であったのか、この恩人は是非知りたいし、当時の模様も聞ききたい」と訴えたが、恐らく梨の礫に終るだろうと思っていた。

ところが、「知っている」と手紙を下さった方があり、東京支部の高橋俊龍氏であった。平成十二年六月一日付のその手紙を要約してご紹介したい。

「扱て、過般有為会誌で、有為会々誌考を拝読致し「あとがき」の点につき、思いあたる点がありますので、かねがね御連絡をと思いつつも、すっかり日が過ぎてしまいました。小生は昭和25・6から同36・3まで興譲館に在舎し、平成4まで東京支部の事務も手伝っていましたが、「あとがき」の二についての記憶を申し上げたいと存じます。

昭和24に興譲館が戦災復旧されましたが、当時の館長が

北村徳太郎先生で、東京支部長も兼ねておられました。復旧一期生が現在活躍しておられる金子芳雄、小森力雄氏等でしたが、翌年入舎した二期生の小生が、何故か直ぐ様色々な仕事を下命され、先生のお宅にも繁くお邪魔して、何かと昔話を、お聞かせいただいた次第でした。(中略)

扱て会誌ですが、その疎開に当たったのは、正に北村先生のご指示であり、その事を「間一髪」だったと申されておりました。有為会誌を疎開して間もなく、館が焼失した訳です。以上が先生からの「きき言」です。(以下省略)

という訳で、筆者の知りたかったお方は北村徳太郎先生であつた事が判明した。

幻の米沢有為会雑誌

太平洋戦争が終つたあと、その爪跡は大きく残り、米沢有為会員の連結さえも破壊して終つたかに見えたが、年とともに、各支部ごとに元の面影をとり戻し、昭和二十四年七月には一応「米沢有為会雑誌」復刊の運びとなつたが、再び休刊に追い込まれる事になる。

この辺の事情は、その三年後の昭和二十七年七月、改めて復刊することになった本格的な復刊第一号の「挨拶文」から当時の思いを汲みとる事が出来るので紹介する。

「本誌復刊にあたって」

郷土を愛する心は、人情の自然であり、美わしい心である。住むところの如何を問わず、職業の如何を問わず、郷土米沢を愛する幾千幾万の心と心が相集まつて生まれた有為会の歴史は、既に永く久しいのであるが、過ぐる年の戦禍は、その美しい心の結びあいをさえ破壊したかに見えた。しかしそれは年と共に各支部毎に、着々旧のおもかげに復して来た。そして遂にわれわれは、今米沢人の全国的な交歓の場であるこの雑誌の復刊にまでこぎつけることのできたのを、何よりのよろこびとするものである。

有為会雑誌の復刊は、一度昭和二十四年にも企てられたことは、会員諸氏周知の如くであるが、それは、諸々の事情のために再休刊を余儀なくされた。今度こそ、会員諸氏の御協力を得て、定期的な刊行の実施をあくまでも期する次第である。(以下略)

このように確かに昭和二十四年刊行された復刊第一号は存在していた筈であつたのに、現物は見当たらない、筆者も京都で探したり、東京の小幡常夫氏に尋ねたり、更に同氏から、当時担当された本間敏雄氏にも伺つて下さつた様であつたが、終に幻に終つてしまった。

なお、前記高橋俊龍氏からも、これらに関する裏話の

手紙を頂いているので、次に記してみる。

昭和二十七年のいわゆる復刊第一号は、橋本信さんが編集を担当されたが、この時話に上らなかつた様に思いますが、別にザラ紙の会誌があつた様な話の記憶もあります。

橋本さんは「通巻〇〇号」と書きたい、とずうつと言つておられたが、これは実現せず「復刊第一号」となつたと。

この様な次第で、幻の復刊第一号となつて終つたのは当時の雰囲気として、あまり重要視されていなかつたのが、実状であつたための様にも思える。

あとがき

一、百年を超える米沢有為会の長い歴史の細部を読みとくことは、容易ではないが、その中でも草創期での出来事は分かりにくい。明治の創刊号発行のいきさつとか、第二の草創期とも言える終戦後の復刊についてのいきさつなどが、そうである。

二、遠隔の東京都にいて、このような米沢有為会の深部を調べることは、少々重荷すぎる様に思ったが、幸い会員諸氏や、米沢図書館の関係者の方々の絶大なるご協力のお陰で、有為会の後姿の一端を垣間見ることが出来たと思う。

三、窪島政男先生のごことは、本当に有為会のお陰で、はからずも触れる機会に恵まれたので、非常に古い話で恐縮であるが、珍しい話を紹介したい。

窪島先生は、そのお人柄からか、親子ほども年齢差のある我々生徒から、兄貴分として親しまれていた。

その先生が昭和六年の春突然退職されることになつた。しかも憤然としてである。当時学校は音楽教育を導入するにあたり、芸術家だからという理由だけで、窪島先生に白羽の矢を立てたのである。生徒側も先生に同情して抗議行動に出た。この異様な空気は尾を引いて、その後いろいろな形の「さわぎ」に発展したのを古い方ならご存知と思う。

窪島先生は退職にあたり、記念の色紙を徹夜して描きあげたと言われて、生徒たちに配られた。その色紙は今も筆者の手許に残っている。

四、大恩人北村徳太郎先生に係わる消息を一つ。先生のご令息北村貞太郎氏は只今京都在住で米沢有為会員である。京都大学教授を長く勤められ、農学博士、熱帯農学の専攻、地域計画論研究室を主宰されていた。また日本学術会議・第六部副部長ほか沢山の役職に就かれています。只今京都大学名誉教授、東京農大教授。